

フランスは、創造性に溢れ、人類の普遍的価値を掲げる国としてしばしばイメージされる。反対に、横柄かつ硬直した国として捉えられることも多い。おそらく、どのようなフランス研究でも、この2つの「暗黙の了解」を前提に組み立てられている。しかし、このイメージは、こと欧州統合という文脈に置くと、全く違ったものとして浮かび上がってくる。むしろ、国際社会の中で葛藤し、自問し、恐る恐る足を踏み出しつつ、様々なアイデアと力を駆使して自身の存在を確保しようとする、狡知な国として立ち表れる。詩人ヴァレリーは、フランスを「立ち上がり、よるめき、倒れ、再び立ち上がり、こわばり、自信を持ち、打ち破れ、熱中し、誇りや諦めや不安、激しさを繰り返す」と擬人化し、その歴史が「極端の連続」であったと記している。この書で目指されたのは、フランス「と」欧州統合の関係性を辿りつつ、このような攪拌されるイメージがどのように、なぜ、通底しているのかということとを解明することにある。

もちろん、欧州統合はフランス単独の政治的企図ではない。しかし、フランスを無視して欧州統合を論じることができないのも確かである。そして、欧州統合を抜きにしてフランスを語るのも、もはや不可能になっている。最も古い歴史を引きずってきたフランスという国民国家が、国家の枠組を超える欧州統合という史上稀にみる野心的な政治的企図を、いつ、なぜ、どのようにして実現していったのかを明らかにすることは、フランスとヨーロッパを理解する一助になるだけでなく、共同体の運命を決める政治という営みが持つひとつの可能性について問うことにもつながろう。

そのために専門分野^{ディンフリン}の垣根を越えて、フランスと欧州統合についての第一線の研究者が集い、それぞれの視角からの特徴が本書では活かされている。外交史、国際政治史、政治史、社会経済史、政治経済学などの多様な足場から、それぞれの時代についての統一的なイメージと解説が提供されたが、この多様性が本書の強みでもある。執筆者が一堂に会して論議を交した機会こそ少なかったが、それでも短期間にこれだけのものが出来上がったのには、冒頭に述べた

ような問題意識が一定程度共有されていたからである。

本の構想から活字になるまでの間、ほぼ2年以上の月日が経った。それまでに、遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会、2008年）、また細谷雄一編『イギリスとヨーロッパ』（勁草書房、2009年）等を始めとして、我が国で欧州統合および関連の各国研究の書物が相次いで出版され、ヨーロッパ・欧州統合史の研究水準は飛躍的に高まることになった。フランスを主語とした同様の書物の存在がまた要求されていたといってもいいだろう。本書で、上記の二冊の執筆にも加わっている研究者がいるのは決して偶然ではない。

本書が活字になるまで多くの方々のお世話になった。まず、出版の直接的なきっかけを作っていただいた中田晋自先生（愛知県立大学）に感謝の念を表さなければならない。また執筆に加わっていただいた上原良子先生と鈴木一人先生には企画段階から相談にのっていただいたことも記しておきたい。

さらに、この本にはフランス外交と欧州統合の実際のアクターとして活躍し、現代の国際政治とEU政治について鋭い分析と意欲的な提言をし続けているユベール・ヴェドリーヌ（Hubert Védrine）元外務大臣による終章を収めている。現場のアクターが学術・研究書に文章を寄せることは日本では一般的ではないが、フランスでは決して珍しいことではない。仲介の労を取ってくれたフランソワ・ミッテラン研究所（Institut François Mitterrand）およびジョルジュ・ソニエ（Georges Saunier）氏に厚く御礼申し上げる次第である。

なお、本書では、「ヨーロッパ」と「欧州」の2つの言葉が混在している。厳密な使い分けはしていないが、前者は理念やアイデアを、後者は実態や制度を指して用いられていることが多いことを念頭に置いていただきたい。

文化人類学者で後世に多大な影響を与えたレヴィ=ストロースは「日本は東に向かってアジアの極を示し、フランスは西に向かってヨーロッパの極を示している」と書いた。「ヨーロッパ統合とフランス」というタイトルを持ったこの本が、ユーラシア大陸の東西の結びつきと、欧州統合とフランス史の発展の一助になることが執筆者一同のささやかな願いである。

2012年5月

編者